梅窓筆記

坤

1曽5
29
2止

内閣 1 5 39 2

帝國圖書館

梅窓筆記巻下目録

掛物上下ヲ巻テ掛ル事　一丁オ
儒書ヲ講ズル僧ノ音声ト同キ事　一丁ウ
佛事ニ袈裟ヲスル事　二丁オ
扇ノ上ヘ二物ヲ置ク事　二丁ウ
狐ヲ神トスル事　三丁オ
蚊松殿　三丁ウ
表衣ヲ縫縮メテ着ル事　四丁オ
大床子ノ御膳　四丁ウ
中陰ニ佛事ヲ修セザル事　五丁オ
門出　一丁ウ
賀ノ杖　二丁オ
百種ノ供物　三丁オ
怠状　三丁オ
ほくそくの事　四丁オ
御修法ノ曼多羅　四丁ウ
善光寺如来ノ文書　四丁ウ
琵琶和琴ノ名器　五丁オ

點心

帝國圖書館印

神ニ茶ヲ奉ル事　五丁ウ
焼亡ニ太郎次郎ト云フ事　六丁オ
米ヲ深ル事　六丁ウ
食膳ニ梅干ヲ置ク事　七丁オ
千世ノ松坂　八丁オ
乞巧奠歌ニかけるヽ糸トヨル事　九丁オ
三七日法事　十丁オ
雨師　十丁ウ
撰集ニ古歌句ヲ改ラレシ事　十一丁オ
忌日ニ神事佛事ヲニ従ザル事　十一丁ウ
抑笞　五丁ウ
物語草紙類ヲ見ル心得ノ事　六丁オ
大工ノ衣冠　七丁オ
男女直衣并女房上髪ノ事　七丁ウ
小解除手祓　八丁ウ
地下祭　九丁ウ
柏拂　十丁ウ
鎌倉右府真影　十一丁オ
人長神樂　十一丁ウ
四十九日　十一丁ウ

養父母ノ族假ノ支　十二丁オ
僧ニ袈裟ヲ負スル事　十二丁ウ
経文題和歌懐紙　十三丁オ
突鼻　十三丁ウ
住吉鹽干　十四丁オ
寸大臣　十四丁ウ
塗籠　十四丁ウ
中古ノ歌ハ万葉ニ及ガタキト云フ事　十五丁ウ
年男　十六丁オ
貴人ナラヌヲ建廟設像ノ事　十七丁オ
折敷作付高坏　十二丁ウ
寫生ノ似貝　十三丁オ
開帳　十三丁ウ
學ハ我家ノモノト思フベカラザル事　十三丁ウ
扇ヲヒロゲテ送ル事　十四丁ウ
大黒　十四丁ウ
戯ニモ大臣名ヲ忌嫌フベキ事　十五丁オ
くちなしトヨル歌ノ事　十五丁ウ
明神　十六丁オ
猿樂　十七丁ウ

白紙　十七丁ウ
婚礼聟取横目扇ヲ忌フ　十八丁オ
鬚ヲソル支　十八丁ウ
繪馬　十九丁オ
社人幼年ニテ元服事　十九丁ウ
樂譜ノ唱歌　二十丁オ
蹴鞠ノ時僧省ヲハカヅル　二十丁ウ
宅替ノ時賀茂ヘ社参ノ事　二十一丁オ
吸物　二十一丁ウ
産屋借地ノ文　廿二丁オ
檜扇横目正目并杉横目扇　十八丁オ
不知姓　十八丁ウ
女ハ酒ヲ不飲ト云フ　十八丁ウ
三十六歌仙ヲ拜殿ニ掲ル事　十九丁ウ
長袖　二十丁オ
神樂モロウタ　二十丁ウ
末額　二十一丁オ
六町町　廿一丁オ
腰抱　廿一丁ウ
白禿藥　廿三丁ウ

神階　廿三丁ウ
有馬御湯治　廿四丁オ
御殿ノ弘廂　廿四丁ウ
銀柳笛　廿四丁ウ
十三面忌　廿五丁オ
日本見在書目録　廿五丁オ
御藥辛櫃　廿六丁オ
御家様上ニテ并勅筆勅額ノフ　廿六丁ウ
服中ニ神号ヲ書事　廿七丁ウ
白川吉田両家ノ神道　廿八丁オ
榊ヲ神體トスル支　廿四丁オ
淨衣ノ色目　廿四丁オ
渡唐天神　廿四丁ウ
慶滋　廿五丁オ
岩科高倉両家ノ衣紋　廿五丁オ
東屋　廿五丁ウ
天神七代ノ神号　廿六丁オ
カセ杖　廿七丁オ
色紙形ニ名ヲカヅフ　廿八丁オ
謡曲ニ禁句ヲウタヒ替ル　廿八丁ウ

以上九十八條

梅窓筆記卷下

掛物ノ上下ヲ卷テ掛ヿ左經記長元八年正月十四日己亥治部省廳云年大風顛倒仍太元御修法可行処有議於大膳職北屋修之中畧件屋短狹佛像高廣仍上下各卷之奉懸云々トアリ茶家者流ニモ此ニ似タル掛物ノ掛ヤウアリ

當時モ饗膳ノ前ニ假初ニ小漬飯ヲ出スヲ点心(テンジン)ト云リ

轂畊録十七八葉今以早飯及飯後午前午後晡前小食為点心トアリ園大曆康永三年九月十六日壬寅晴今

日上皇可臨幸天龍寺中略於南面客殿先供湯次供
點心次茶也トアリ此外ニモアルベシ又禪家ニ点心ト云
フ多アリ
經史ヒ論義ノ音声ノフ台記久安二年六月二日庚子
依例講尚書講師直講師元問者余及敦任皆二重引
音如僧同年八月廿一日有家竪義事中略今夜竪者
探題皆無失可謂有勢但竪者音声頗中略不練習僧歟其題唐声讀
自余事不異于僧トアレハ音声僧ノ經論義ニ同シカ
リシニヤ
旅行ノ以前ニ門出ト云フヲ俗ニスルフ台記久安四年

二月十日取要入夜向宗俊阿闍梨房是出門也十二日
為道虚日之故也即行稜十二日可参八幡仍自今
日神齊トアリコノ例ニ據セハ今モ上道ノ日アシケレバ
己前吉日ニ門出ヲセハ便宜ナルベシ
佛支ニ稜ヲスルフ江次第ニモミエタレヒ左經記長元七年
八月十五日壬申天晴午後著八省東廊行大稜是明日
為被行仁王會所被祓清也トアルニ佛支ヲ行フトテ先
祓ヲスルフ分明ナリ
續後撰賀部建保三年和哥所ゐく釈阿九十賀と
ゐけるに付根の松乃竹の葉にかき付侍き

哥めされなる小　大蔵つる家

そもそもたちはくらくつきそめて今行末もかしとそらの

玉海建仁三年十一月廿三日取要置鳩杖以銀作之件

杖竹形也其上居鳩也有一枝二葉件葉書和歌有

家朝臣詠之トアリソノ杖ノ寸法ハ知レ子氏近世

ニ賀ニ調セラレタリシヲ巻末ニ圖ス

物ヲ假ソメニセヌ料ニ扇ヲ敷テソノ上ニオケルモフルキ

ナリ侍中群要第八御書使叉賜御書之後暫置日記

辛櫃上必扇敷下若殿上一無人令主殿司守トアリコノ外ニモ日次記ニアリ

トオホエケレト忘却セリ

佛事ニ百味ヲ供スルヿ人車記嘉應元年九月廿六日己卯

天晴取要依ニ故殿御月忌中暑百種供物御供養如例

狐ヲ神トスルヿ續古事談云ハ聖干を祢の体ヤ

なしたる社の多きをてきらるゝものあり又壇

嚢抄第二狐ヲ祝フ社女神ニテマレマセハ女官ニ准テ命

婦ト云フ呉音ニミヤウブト申セルニヤトアリ今モ山城伏

見ノ稲荷ニ命婦社ハコレナルベシ

昔シ怠狀ト云ハ今ノ過證文ナリ失錯アル片怠狀ヲ奉ル

ヿアリ又カヘシ玉フヿモアリ

傳宣草

宣旨返給怠状於外記状

権右中弁光継朝臣進怠状事

仰宜徴将来返賜上

右宣旨可被下知之状如件

文保二年十月六日　春宮大夫判

トアリ今時モ過去ヲ許シテ過状ヲ返シ未来ヲ徴フ

アリ

姉小路北堀川東橘逸勢家ノ蚊松殿蚊字ヲハヒトヨムフ

ヲ疑フ人アリ水左記義暦四年八月廿八日壬午晴今日

寢殿御方於蚊松被供養佛經トアリ蚊ハ蚊ト同字ナリ

姉小路北西洞院東高明親王家高松殿モ西ノ蚊松

ニ對セシ名ニテモヤアリケン

今ノ暦ニ神よ〳〵ト云日ハアレドほゝけよ〳〵ト云日ハシルサ

ズ予ガ藏スル後堀川院貞應二年癸未年ノ假名コヨミ

ノ小片にほとけよ〳〵又神ほとけよ〳〵ナトノ日ヲシルセリ

後世ニ除タリトミユ神吉日三宝吉日ニ拾芥抄及陰

陽家書ニ分明ナリ

表衣ヲヌヒチヽメテ着フアリ明月記建仁三年十二月廿

七日取要中將殿御拜賀戌時許自九條殿令参入給御

裝束遅々今夜著殿下御袍給縫縮トアリ

正月ノ御修法ニ用ラル曼多羅ヲ俗中ニハ弘法大師ヨリノモノヽヤウ云ヘヒ駕輿丁舟木氏記元禄六年十一月十八日於仁和寺宮中御修法本尊兩界曼多羅新畫開眼供養トアリ

大江俊冬記當時大床子御膳ハ享保十八年丑年御再興トアリ

大和國法隆寺ニ善光寺如来ノ文ト云モノアリ密封シテミルヿナラサレヒ壜嚢抄巻十七三十九丁ニ善光寺如来ト聖徳太子ト往来ノ消息ノ文出タリミテ知ベシ

百練抄天福元年五月廿九日普賢寺入道攝政薨年七十四

終焉之時各不可面謁中陰不可修佛事之由息被相定トアリ普賢寺殿ハ基通公ナリ息トハ猪熊摂政家實公ナリ本邦ノ中世以来中陰ニ佛事ヲ不修ハ實ニ希ナリ當時ノ神道者流ノ賞歎スヘキヿトオモフナリ

拾芥抄ニ出タル和琴ノ名器ノ河霧ハ官物ニテ御神樂ノ時ハ被用シガ万治四年焼失セシ後ハ官物ノ新絃ヲ用ニル由安陪季尚編輯セシ樂家録ノ和琴祕録ニミエタリ惜ヘキヿナリ琵琶ノ巖ハ今ニ傳テ今出川殿

ニアリメテタキヿナリ

神ニ茶ヲ奉ルヿ日吉社神道密記 祢宜正四位下大蔵卿行丸撰 毎歳卯月末日ニ宮八王子十禅師三宮ニ浄水煮茶奉調進非古法トアリ便ニ云江次第佛名ノ時ニ引茶トアルヲ茶道者流ニ挽茶ノヿトオモヘルアリ誤ナリ引茶ハ茶ヲヒクトヨミテ茶ヲ配リアワルヿナリ行茶トカキテ行茶ヲトヨムヘキ行ノ訓ノ假借ニ引ノ字ヲ用タルナリ

柳筥ハヤナイハコト云ズヤナイバトノミ云ヘシ明月記元久二年十二月十五日元服記ニ柳葉トアリ筥ノ字ノ假借ニ葉ノ字ヲ用タルヲ以テ知ベシ

燒亡ニ太郎次郎ト云ヿ清獬眼抄後清録記云治承二年戊戌四月廿四日戊子夜半許七条北東洞院東中許洞院面燒亡中暑世人号次郎燒亡也太郎ハ去年四月廿八日至于大極殿燒亡云々

源氏物語 神代より世ふあはれなるしをきけるなり日本紀ハ多くかなをまぜかくれらよくそくちくもくくもくくもくくきくとはあるめとてくらひ給ト云ヲ花鳥餘情ニ日本紀三十巻始于神代至持統天皇御宇一品舎人親王安麿等撰之今案神代ヨリ世ニアルヿヲシルシオケルハ日本紀ノ支也コレラニコソトハ

惣シテ物語草子別テハ住吉物語ヲノヱフ吾國ノ書ニハ上モナキ日本紀ヲオシサゲテソレハ大カイヲコソシルシオキタレ、コトニカンナサウシナトニコソ、サシクミチ〳〵シキ支ハ有〳〵ケレトカ、セヱフハ都テ物語草子類ヲ翫味スル人コ、ニ心ヲトゞメテミルベキヿ也精撰ノモノニハ却テ嫌疑ヲ用捨スルヿアレヒ物語草子ニハ用捨ナク當時ヲアクマテニカヽノモノナレハ時世ノヤウスヨク考ラルベシ後世トテモ草子ニ當時ノヿヲ書リサレハ物語草子ノ作者ノ名ヲアナカナニ穿鑿ニ至ルベカラズ

新米ノ代ニ米ヲ青ク染テ用ルヿアリ大和国春日社年中行支記云八月諸式如平月但旬神酒從今日用濁酒散米用新米若年穀未就則以米染青トアリ

棟上ノ片大工ノ衣冠スルヿモフルキヿ也玉葉兼安二年二月三日建春門院新御堂上棟上棟大工束帯自取麻昇屋上トアリ

食膳ニ梅干ヲ置ヿハ毒ケシナリ世俗立要集ニ兼久以後武家ノ肴ノ撰ヲミルニ如此梅干ハ僧家ノ肴也而テ俗家ニ用ラル支如何若漢土ノ作法欤漢土ニ鴆ト云鳥アリ其鳥ノ羽ヲ杓入ツル酒ヲ鴆酒ト云此酒ヲ飲ツレハ必ス死スト云〳〵其變ニ梅干ヲ用ル而ヲ若歇アリテ鴆酒モ

ヤスクムルトハシノ臺ニ梅干ヲ一置トヱミアリ

直衣ハ官服ニアラス褻服ナリ褻ハケハレノケニテ私ノ服ナリ故ニユリサレハ公ニ直衣ヲ着テ參ラレズ又女房ニモ直衣アリ江次第一御藥条 着ヲ尋常唐衣裳称之直衣女房同第十九殿上賭弓条 女房四人扈従命婦二人蔵人二人直衣 トアリ女房ノ直衣ト云ハ裳唐衣バカリニテ表衣ヲキヌヲ直衣ト云トミエタリ中世ヨリ女房ノ表衣ノ沙汰ハナケレ氏上古ハ唐衣ノ上ニ表衣アルベシサテ花鳥餘情白兵部卿殿上童束帯ノ時總角スコレヲミツラトイフトノ井スカタ直衣ヲ云ソノ時ハミツラユハストキカクルナリトアルヲ准拠ニテ女房モ直衣ノ片ハカミヲアゲズ額許ヲ上テトキカクルナルベシ都テ女房ト童ハ同シ定ノモノナリトキカクルトハ今ノスベラカシノ一也俗ニスベラカシサゲカミヲ礼ナリトオモヘトシカラズスベラカシサゲカミハ褻ノ一ナリ髪ヲ上テ笄シスルカ女ノ礼ナリ髪ヲ上ルヿモ中古ヨリ沙汰ナケレ氏禁秘御抄御膳事条 女房上髪三位已上釵子許也暑氣比凡聽不上髪トアルニテ知ベシ此比ステニウルハシク髪ヲ上ルヤウサタカナラサリシニヤ

伊勢街道ノ伊勢ニ松坂ト云所アレド今ノ俗ノオトリノ音頭ト云モノニ千世ノ松坂トイヘルハ山城ノ栗田

ノ東ナリ應永卅一年極月十四日室町殿御參宮私
日記
我も又ゆふ八ゝ形よ入日うけうれくむるあふ坂の山
松坂小をはきぬ年〳〵歳〳〵乃御糸宮よりとはゝ
はけ所〳〵も手〳〵ゆの坂乃名をたゝ〳〵てたひこゝの
旅宿ふあひうゝ形ひめるも神恵のしるしなるもの而
ちり
君八なをを代の花さく松坂をゝ〳〵十廻りうゝてゝるへき
小解除手祓ト云ヿ日次記ニアルハ假初ニハラヒヲスルヿナ
ルベシ左經記長元九年五月十九日取要以御骨一升許奉

納茶椀壺中畧事畢関白相府以下歸路云〳〵於鴨河作
車手祓只以草人形不備祭物又无縁葬作法記云民部卿記云
人々歸ル時取近邊草カキワケテ懐之渡河水之時
面ヲ以草カキ撫テ流之是ヲ名手祓棄畢白杖同棄
畢或記云於水便所少解除以人形撫之棄川畢トア
リ小祓トアルモ少解除ト全シヿナルベシ
七月七日乞巧奠ニかしはる糸ナト哥ニヨメルカスト云ヿヲ
哥學者流ニカスハ手向ト云ヿナリト云説アレド然ラ
ズ乞巧奠ニハ人料ノ物ヲ星ニカスヿナレハ故モナクタヽ
カスト云ヿナルベシ人車記仁安三年七月七日丙寅内

裏御遊具於清涼殿東庇佳例被涼於東庭乞巧奠蔵人基光奉行於桂芳坊御服犬頭糸奉借織女トアル二借ト云フ分明ナリ犬頭糸ノ犬頭ノフハコトニ用ナケレハ別ニシルセリ

當時モ吉田村松尾村ト云ベキヲ俗ニ吉田地下松尾ノ地下ト云リタ、吉田地松尾地ト云フニテ下ノ字ニコヽロナカルヘシ康富記宝徳元年八月廿四日壬申是日松尾祭去四月依神領違乱令延引去月廿五日者社家祭云地下祭社務職被改動云〻也トアリ廿四日八公家ヨリノ祭ニテ廿五日八地ノ一ツリト云フナリ

延喜神祇式會三七日法支當日不得参内トアリ長秋記天永二年二月廿日取要参左府尋申云會三七日法事當日不得参内云〻而謂三七日四十九日間何ヲ可申哉仰云件事無傳聞宇治殿雖令尋道者等申旨不分明但近来所習来者亡者在家時訪人雖不身穢不参内又觸穢了後雖會法事参内常事也者今夜参内トアレト吉槐記元徳三年九月廿日大判事明清入来予相尋云所載神祇式三七日法支者其身雖不穢當日不令参内云云此三七日ト八如何明清申云此支秘事也三七日ト八三十ヶ日已後事也

五七日六七日七々日ト八三十ケ日已後之間其身雖不
織不令参内ト載之也トアルニ分明ナリ
愚昧記兼安三年三月十四日取要柏掃（カシハハキ）掃木塗黒云云或不塗トアリ
柏夾ト云ル名義ハ詳ナラ子氏柏夾トテ冠ノ纓ヲ巻
テ木ニテ夾ミトムルヿハ火災或ハ旅行ナト道ノ間
纓ノ風ナトニ飛揚セザル料ナリソノ仕ヤウ説々ア
レドモ是非ヲシラス橘直幹草紙詞書ハ慶運画シ
レズ火災ノ所ニ柏夾シタル騎馬画巻末ニアリ
抱朴子曰辰日雨師者龍也トアリ文徳實録嘉祥
三年七月丙子朔取要進大和國丹生川上雨師神

階授正四位下トアリ雨師ハ龍ナルヿ参考シテ知ベシ
万葉集ヲ唱ル者流ニ鎌倉右府ヲ殊ニ称スル故ニ
ソノ真影ヲ大臣巻物ヨリ摸シテ巻尾ニ圖スソノ
巻物ハ大臣八十人ノ真影ニテ豪信法印ノ画ナリ
和歌ノ撰集ニ古哥ノ句ヲ聊ツヽ改テ撰ハレシヿ多シ
哥ニ限ルベカラス河海抄葵四条大納言公任の和
漢朗詠ニおほく古章句を二三字を改て入たる
もあり獲落危牖壊宇秋有秋風とうるを有秋
聲ともあり又樂天の詩ニ可是禅房無熱到とあ
るをも不是禅房と改たり是等の例ナラン

明月記建久十年八月四日取要出京参日吉中暑於大宮
宝前被行御神楽俗称人長神楽トアルハ今内侍所
鴨八幡ナドニアル神楽ノコナリ里神楽ニ対テ神楽
有和琴等
歌ヲウタフ神楽ヲ人長神楽ト云ナルベシ
忌日ニ神事ニ預ラザルコハ常ナレモ玉海兼安五年二月
九日取要明日當遠忌故人曰忌日不従神事不従佛事ト
アルヲニレバ佛事ニモ預ラサルコナルベシ忌日ハ終身喪ナ
レハサモアルベシ神事佛事ニハ限ラス他事ニモ預カラス
謹慎シテアルベシ
中陰ノ四十九日ヲ薨日ヨリ計ルコ中右記永久二年四月
三日京極大北政所右大臣師房公女薨同月廿二日葬礼五月廿二
日故北政所四十九日也コレハ薨日ヨリ七々日ヲ計レリ
北山抄傍親就養父母之族可有其假至于本生之族不
可假但可心喪トアリ今ハ養方ノ族ニ喪セス本生實方ノ
族ノミニ喪セレモ元禄ノ服忌ノ定ト云モノニハ養方ノ族
ニ喪スルコミエタリ古代モ此定ノ行レシコ百練抄寛治
三年十月四日諸卿定申中暑凡爲人養子之者本生傍親
服不可著之由僉議了トアリ又助無智秘抄臨時有心喪
人ノ事ヲ示シの表袴ハ色ノ〻童をきる中暑平ノ親義
人たりし時伯耆ヲ召ノ卒去ノ時ノ装束

きぬ件の胡桃八仍親伯父也ちうを惟仲卿殿
うたるにより着服せ心喪の装束をぬちかる
うトアリコレ北山抄ノ文ニ叶ヘリ養子ノ義又ニ對シテ
ハサモアルベキ理ナリ神道者流ノ忌ト云論ニカヽハラ
ズ恩義ノ輕重ニアルベシ
高坏ノ上ノ四角ナルハ折敷作付高坏ト云モノ也小右記
寛仁二年六月廿八日取要御前物朱漆折敷作付トア高坏四本
リ松尾社及春日社ニアリ巻末ニ圖アリ
僧ニ被ヲ負スル左經記長元四年九月十七日取要中
納言奉勅召陰陽寮令勘可負祇園僧被々日時

是僧於祇園曰主内葬送仍其祟出御卜因之所被
行也云云
當時云寫生ノ似貞ナト云フモフルキフトミエテ古今著
聞集ニ後堀川御時似絵を御好ありけるに北面下﨟
御隨身なりしの彩をたゝ糸ゑ信実朝臣を先てかく
せらるゝトアリ
經文ヲ題ニシテ歌ヲヨメル片懐紙ニ經ヲ料紙トスルー
ナリ薩戒記永享六年十月一日取要抑件一品和歌予
當勸持品先日詠送之了懐紙為經料紙トアリ南
都一乗院宮御蔵經文題歌西行寂蓮ノ外當時

人十二枚ノ懐紙三ナ経文ノ裏ニカケリフノ外古筆ニ
多ク経文ノ題ノ歌ヲ経ノ裏ニカケルアリ予家ニモ
日野左大臣勝光公経文題懐紙ヲ蔵セリ経ノ裏
ナリ

開帳ノ名目モフルク聞エタリ二水記永正十八年二月八日
早旦詣木屋薬師堂（烏丸）従去月開帳也聖徳太子御作
云云古物御面貌不慥八百年許無開帳云云トアリ
突鼻ト云フ康富記應永廿七年十月十三日（取要）突鼻（ツクハナヲ）
之輩數十人御免トアリ
學ハ天下ノモノニテ我家ノモノトオモフベカラスト荷田

春満ノイハレタリシハ見識ノ博シト云ヘシ稲荷本社
ノ社法モ多ク此人ヨリ改シフアリト云リ予稲荷中
社祝正五位下某ニ彼社ノ社参以下ノ次第ヲ借テ
一覧セシニ拍手ノ条ニイタリテ拍手（小大）或（大小）ナドシ
ルセリコレト部家ノ遺風ヲ傳シナリ拍手ニトカ或ハ拍
手ニ段トアルヘシ後ヨリステ古風ニセントスル片ハ皆コノ失
アリ學者ノコヽロヲ附ベキフナリ
住吉ノ塩干ノフ和長卿記延徳四年三月二日壬申晴今
朝藤中入道室家依誘引詣住吉社為可見物塩干也ト
アリ

扇ヲヒロケテ送ルヿ愚昧記仁安四年二月十三日取要蔵人
治部少輔兼光勅使参入中略兼光持御扇押二誓敷紅薄様一其上置二赤色御
扇一枚一披置之トアリ
後愚昧記應安二年十二月廿二日消息云取要寸ス大臣ハ号二沓
取官人一呂具条勿論トアリ寸大臣ト云ハ大将ナドノ兼官ナキ
ヲ寸大臣ト云ナリ
大國主ヲ大黒トスルヿモ久シキヿト三エタリ親長卿記
長享二年十一月八日取要夢中歌件湯山明神三輪
明神也始来臨影向之時御姿為二大黒一云云
塗籠ト云モノヲヤヽモスレハ土蔵ノヿニ思フ人アレドシ

カラズ塗籠ハ今俗ノ納戸ト云所トオナシモノニテ寝殿
ノ中ニアルモノナリ宇津保物語上くらひらき塗籠の
あらはく人の家もえんさる所よむしもんきん
てんひとりめくりはうへハもてぬりこめれかさなり
こゝろよきあるしのもとみまつはこさまつつめきくらう
ヿモト云ニ分明ナリ
戯ヿト云ハ氏大臣ノ名乗ヲ用ルヿヲ好ザルヿ明月記建暦
二年十二月廿八日取要可レ候二連歌座一由被レ仰云云依二甚雨一先
相二儲馬場殿一小時出御如レ例儀始二賦木人名一人名トハ當
世人名字隠題用也不レ可レ嫌二尊卑一云云此中有二隆忠名一

雖戯ゑ亟相名如何太不便トアリ

千五百番哥合ニ俊成卿判詞ニ中古の哥ハ万葉の心に及ひかたくうるわしトイハレシハ諸ナルヿニテ詞ハ万葉集ノ詞ニヨミイタシヌレド心ハ及フベカラス心ノ古ニ及フヤウニ有ヘキヿ也

同卿ノ六百番ノ歌合ノ判ニ顕昭ノくらゝとるかしこき海トヨメルヲ万葉ふうなる風にえ侍まじけれの狂哥体の哥ども也たゞ侍る中ゝ侍よやいとおもしろくきこゆトイハレタリシハ鯨ヲ万葉ニイサナトヨミシヲシリ玉ハサリシニヤ又クチラトヨミテモ何モオソロシキヿハアルマシキニヤ

年男ト云ヿ南都春日社記應永廿五年戊申正月日社頭之詣日記若宮常住神殿守春雄一應永廿五年正月一日

曉御奉行祐富殿年男下番神殿守宗時ノ代官宗繁一面一瓶持參ス時ニ神主殿ヨリ鏡一面ツミクタモノニテ御酒三献祝了但下部ニハ小餅一前給ナリトアリ

明神ト云ハ公式令ニ明神御宇日本天皇詔旨トアリテ現在ノ天皇ヲサシテ申スヿニテ神ヲサスニハ名神ト云ヿナリシカ名ト明ハ字音ノ同シキ故ニ通テモ用ヒタリサレト差別ハアルヘシ續日本後紀承和十年夏四月

丁丑山崎神預之名神トアルヲ同紀兼和十五年春
三月壬申勅奉充山城國乙訓郡山崎明神御戸代
田二町トアリ同神ニテ名神ヲ明神トカケル證明ヲ出
スノミ仁和三年三月十四日賀茂明神春日明神ト
アリ此外ニ又台記久安三年二月廿二日取要春日祭
大名神四座ヒカケリ後世ニナリテハ大明神ナトヲ
被授シヿモアリシ也宣胤卿記永正七年十二月十
二日
近江國神崎郡小幡社可奉号惣社大明神之由
被聞食訖者依

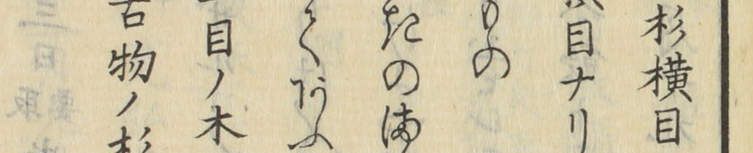
天氣執達如件
永正十七年十一月十二日　左中弁判
小幡山神官中
同記ニ大織冠鎌足公ニ被奉授大明神号ヿモアレト
今時ノ如ク私ニ大明神ト云ヿハナカリシナリ
貴人ナラ子ヒ建廟設像ヿ續日本後紀兼和三年十
二月辛丑安房國言安房郡人伴直家主立性肅然常守孝
道父母没後口絶滋味建廟設像四時供養事死
如生未嘗懈倦トアリ滋味ヲ絶廟ハ建スヒ如在礼
カクアリタキモノナリ

禁秘御抄ニ有レ藝者依二其支近召支近代多如二寛平遺誡一不可然況如二猿樂一参二庭上一可止事也トカヽセ玉ヒシ猿樂ヲ今俗ニ云能乱舞ノコトオモフヘカラス建暦ノ比今ノ乱舞ト云モノハナカリシナリ三宝院満濟准后記應永世四年正月十三日巻簾覧猿樂トアルハ今ノ乱舞ニテ此記ニテミレハ貴尊モ簾ヲタレスミ玉ヒシナリ

昔シ白紙ト云ハ印ヲオサヌ文書ヲ云シナリ續日本紀養和十一年六月戊寅主水司言司家之政觸類繁多而本自無印只用白紙支渉輕疎未免嫌疑望請准内膳采女司被給件印者勅宜充之トアリシニ分明ナリ

檜扇ニ横目正目アリ杉横目ノ扇モアリ皆木理ノコトナリ

一サメニ對シテノ横目ナリ後光嚴院詞土佐經隆画職人歌合八番右ひもの



ト云ニ分明ナリ正目ノ木理ハ人ヨク知レトモ横目ノ木理ノ紛ハシキ故ニ古物ノ杉横目扇ノ小片二三枚ミシヲ巻末ニ圖ス

婚礼聟取ニハ横目扇ヲ忌コトナリ長秋記元永二年十月五日早旦依二招引一向二伊豫守許一執聟間事下畧同月

廿一日取要帯野叙持笏扇給件扇下官調進施泥繪不トアリ
用横目忌名儀也
姓氏ノ不分明ノ人ハ不知姓其トカケルヿトミエテ中右記
大治五年十一月廿三日取要常陸清原近宗安房不知
姓實信トアリ
古代ハ都テ鬚ヲ除ザルヿノヤウニイヘト源氏物語ハ本
ひけるともらりけくゆるしたけるとおも
ひのきうらもけよやりをむへうトアルヲミレハ此
比ハ既ニヒケヲソリヒヒシニヤ
我朝ノ礼ニ女ハ酒ヲ不飲ト云ヿアリソノ來由ハ知ラ子氏
玉葉治承四年七月十九日己巳天晴此日姫君着袴

也中暑御前物臺六本盤二枚依姫君不供酒盞也玉葉承元三
年三月廿三日取要此日故攝政前太政大臣長女有入宮
事中暑次供蘇芳織物打敷有伏組裏蘇芳打也臺六本朱臺也用銀器中盤居銀酒盞供之不供如何但我朝礼女
必不飲酒仍不更催三位下居向臺食之トアリコレラノ記文ヲ拠ニテ婚礼
ニモ女ノ前ニハ酒盞ニ酒ヲ入ザルヲ故實トス
繪馬ト云ヿ朝野群載巻二献供物於北野廟敬白献上
取要色紙繪馬十匹中暑寛弘九年六月廿五日トアリ又宣胤
卿記永正十七年十一月九日明日多武峯社遷宮関白
御使衛門佐十オ宣綱中暑宣秀相伴下ル繪馬二枚進云
云トアリ

三十六人歌仙ヲ拜殿ニカクノ親長卿記文明三年五月廿二日
次悲田院彼寺邊北野天神勸請或仁三十六人歌人可
書進拜殿寸法所望之由令申之間罷向見廻了相伴
菅相公云々
社人ハ幼少ニテ元服ヲ加フヨキニヤ康富記宝德元年
十一月十九日甲子大原野祭取要神主未加首服著淨衣
勤祝師役云云十二三才之童形也云云不可說次第欤
トアル二春日社司師盛卿記應永十年十一月十四日昨
日故若宮神主祐深次男令元服實名祐冨生年五
才云云トアリ大原野社上古無神主故臨期ト定其人

ト江次第ノ頭書ニアリシカ此比ハ神主ノ出来シトミユ
官家ニ隨フ者ヲ長袖ト云フ伊勢山田福嶋家ニ藏ス
ル古文書云
汝支長袖之條自然非分之儀申試候輩雖有
之不可羨引間北畠中將任一札候間鍋次郎福
嶋家可相續永代不可有相違者也
天正五六月廿四日　信長　御朱印
大神宮北監物大夫とのへ
樂譜ノ唱歌ノフ愚問記抄物云成佐云ノ唱歌ノ詞ハ
百濟国ノ語ナリ我朝ノ音樂濫觴ハ百濟國ヨリ

渡ルナリタリチリ如此ノ詞ナリ皆彼國ノ語ナリ
神樂ニもろ〻を作もと云ハ庭火ノ哥ノ末句ヲウタヘト
仰ラルゝ也近比ニハキカザリシカ柳原紀光朝臣ノ神
樂奉行ノ時イツカ此支アリシトキケリ綾小路俊宗卿
ソノ時ウタハレシカド秘説ニヤキコエサリシトゾ當時ハ
舞樂ノ片詠アルモノヲウタフ片モキコエスソノ所謂ヲ
シラス
蹴鞠ノトキ昔ハ僧クツヲハカサルヿ内外三時抄書云僧
ハ昔沓なく事なゝ尻切なる紙をもてゝ結てき
始て著沓るハ保元四年五月之日寅尋自院賜沓

韈著之ゝ〻今ハ沓ヲトアリ
舞樂競馬ナトノ時ニ末額ト云モノハ今ノ鉢巻ナリソノ
引ヤウ古代ハ冠ノ下ニ引タリソノ圖巻末ニアリ
山城ノ賀茂下上ノ社ハ一宮ニテ地主ナレハ祭ニモ國祭
アリソノ故ニカ昔ハ宅カヘナトニモ一ツ此社ニ申セシヿ
ニヤ梁塵秘抄口傳集第十二仁安四年二月七八日之ゝ
おほ雪ふりあれしも日ぢゝ紙かへむいゝ法中之賀茂
へまいりきトアリ
内裏ノ六町町トテ當時モ掃除ノ役ヲ勤ムル町々アリ中山
親綱卿記文禄四年十月廿五日子晴就六町々新在家普

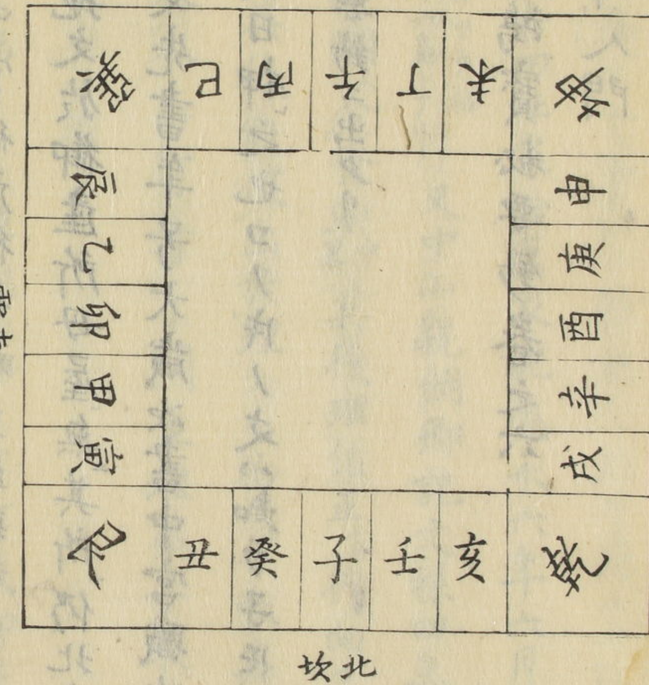
請之儀ニ付為一家伝言中入ゝ也然其民法（折紙考）
ゝやトアリ
吸物ト云フ吉田社家鈴鹿家記應永六年六月十六日嘉定
中略 吸物（ウツワ柚十六島トアリ）又中山親綱卿記文禄四年極月三日丑
晴早天醍醐ヘ令登山中略其後理僧正ニ行向了従三門主二
献有之其後飯被出於理スイ物同一献其後飯有之
其後水本ニ行着了門主理第子来儀スイ物有之
飯相伴トアリ
産婦ノ産ニ臨メル片腰抱ト云フ室町殿御産所日記永
享六年二月十三日取要御腰懐ト云フアリ

産屋ニ借地ノ文ヲ押（オス）フ山槐記治承二年十一月一日辛
卯天晴中宮御産御祈中更典薬頭和氣定成朝臣参
入押ニ借地文於御産所母屋無其所仍北庇北上長押
押之件文先書年号大歳次書中宮職次書借地文
當月朔日押之也コノ片ノ文ハ知ラ子ニ借地文續添
鴻宝秘要鈔ニ出タリ

續添鴻寶秘要鈔巻之六

婦人門

産婦借地法



體玄子借地法咒曰

東借拾歩　西借拾歩　南借拾歩　北借拾歩

上借拾歩　下借拾歩　壁方之中四十餘歩ノ安産借地忍有穢汚或有東海神王或有西海神王或有南海神王或有北海神王或有日遊將軍白虎夫人遠去十丈軒轅招揺擧高十丈天符地軸入地十丈令此地空閑産婦其産所該録作其氏安産産所該録作居無所妨礙産所該録作碑無所畏忌諸神擁護百邪逐去急急如律令勅

右如此朱二テ書テ産ノ月三入ヨリ産所ノ北ノコカヘ

二オスベシ香ヲ焼テ三返コレヲ誦ス

白禿ノ薬鐵博士丹波康頼醫心方第四裏書云

白禿

大黄一切　硫黄栗大　塩同　味曽同　麻油同　酒同　酢同

又方

猫頭灰死者鳥頭灰　竹虫屎此二味等分合テ男ニハ雌鶏女ニハ雄鶏ノ冠ノ血ヲ入テ攪合テ受テホロ〳〵トシテスリヌルヘシ但先髪ヲヌキステ後桃木ヲ煎テ瘡ノフタヲ洗ステ、此薬ヲヌルヘシ度〻スヘシ

諸神有位無位ノ差別ナリ正六位上ト云フ文徳實録

仁壽元年正月甲戌朔庚子詔天下諸神不論有位無位叙正六位上類聚三代格嘉祥四年正月廿七日大政官符ニモアリ則仁壽元年ナリ

伊呂波字類抄ニ吉田社永延元年山蔭中納言奉鎮之春日大原野奉崇之以榊為正体トアリ今モ神ヲ祭ニ此定ニテ榊ヲ正体トシテ崇奉ハ穂ナルベシ

至尊ノ有馬ノ湯召シ御湯治ノ丁百練抄正元元年十月五日乙亥自今日主上御湯治被召有馬温泉湯トアリ

拾芥抄ニ浄衣色アリ青黄赤白黒ソノ修法ニヨレリ

山槐記治承二年十月廿九日取要酉刻座主宮著黄淨衣令懸五帖
御袈裟給参給トアリ

禁秘御抄ニ清涼殿ノ條弘廂板九枚トアルハ孫庇ノ
幅一丈ノトコロヲ両方ノ長押ヲ五寸ツヽニシテ一尺ノ
板九枚ニテ張シヲ云ナリ巻末ニ圖アリ

世俗ニ渡唐ノ天神ト云モノ卧雲日件録文安三年四
月十五日取要翌日真智客来訪曰我多天神撫梅一
枝附懸小袋トアリ

銀柳筥アリ権記長保二年十一月十六日己丑詣左府
奉檜扇卅枚以銀揚筥入之

賀茂ノ姓ヲ慶滋トスルヿ権記長保六年九月廿五日取要
改賀茂為慶滋トアリ

十三回忌ノヿ東鑑寛元年十二月廿五日取要故右大臣家
十三年御追善也行西奉行之正日雖為明年正月廿七
日有沙汰被引上之トアリ

山科言継卿記天文十四年六月二日暮々衣紋予束帯藤
黄門ヱ罷向ウシロ直シ参内トアリ藤黄門ハ高倉殿
ナリコノ比ハ衣紋ヲ掻ニ両家ノ差別ナカリシニヤ

河海抄ニ日本見在書目六藤原佐世撰トアリ書目ハ
世ニ全篇ノナカリシモノトオモヒシカ大和室生寺

ノ印アル古本粘葉一冊書肆カ買得セシヲミルニ五六百年前ノ古本

日本國見在書目録

正五位下行陸奥守兼上野權介藤原佐世奉

勅撰

トアリテ部門ヲ立テ書目アリ佐世ハ藤氏儒士ニテ字多醍醐ノ朝ノ人ナリ希代ノ書ナリ得テミルベシ予寫シオカサリシハ遺恨ナリ

太平記叙卷渡邊氏ノ家ハ破風ナシニ東屋ナリトアリ

四阿ハ破風ナシ兩下ハ破風ツクリナリ唐招提寺ノ金堂四阿ツクリナリ卷末ニ圖アリ

河海抄 後のうらの系 昌泰元年十月競狩記 取要 典藥頭阿保朝臣常世著ニ故幣青白掾衣隨ニ御藥幸櫃云々コノ幸櫃イカナリシヤ可考

舟橋家天神七代神号叀ヲカケル書ニ云 奥書天文十年十月朔日環翠軒宗 右判アリ

一天神七代神号事

吉田説ニハ天地自然ノ御名ニテ神号ノ義理ヲ不付之叀家ノ習也後成恩寺殿御説ニハ神号ノ義理ヲ付ラルル暫其義ヲシルシ進スルモノ也トアリ此吉田家ノ説ハ

實ニ古傳ナルヘシ又谷重遠甲乙録第七ニ有形神有社無形神無社或有社後世所為也此経晃之説ナリトアリ經晃ハ内宮中川荒木田經晃神主ナレハ此ハ神宮ニ古傳アルヿナルベシ

當時ノ書家ニ御家様ト云ヿアリ蹇驢嘶餘云一世尊寺清水谷ハ能書ノ家也是ヲ家様ト云也旧院様ヨリ後圓融院家様ヲアソバシ改テ勅筆ガクヲイカニモ風流ニアソバシ出シ諸家ニ學之トアリ勅筆ト云ハ宸筆ト云ヿトニエタリ後世コレラニヨリテ勅額ト宸筆ノ額ト同夏ノヤウニナリタレモ差別アルヘキヿ也

名物六帖通鑑周紀世宗勅天下寺院非勅額者悉廢之註胡三省曰勅額者勅賜寺額如慈恩安国興唐之類按勅許建寺則賜額謂之勅額非宸筆扁額也トアリ分明ナリ

平家物語第三大塔建立のすゑ清盛高野へ詣給ひけるに御供の僧のなかにおくれかんへ彩色をしたるにいとくるしきなりとて老僧のなくはつかまつるかまつるかまつるかまつるとて彩色をしたるにすかして出来ひよ波をたゝみかせ杖のふとゝゝなるにすかして出来給へりトアリ伴大納言画巻物ニ老人カセ杖ニスカリタル圖巻尾ニアリ

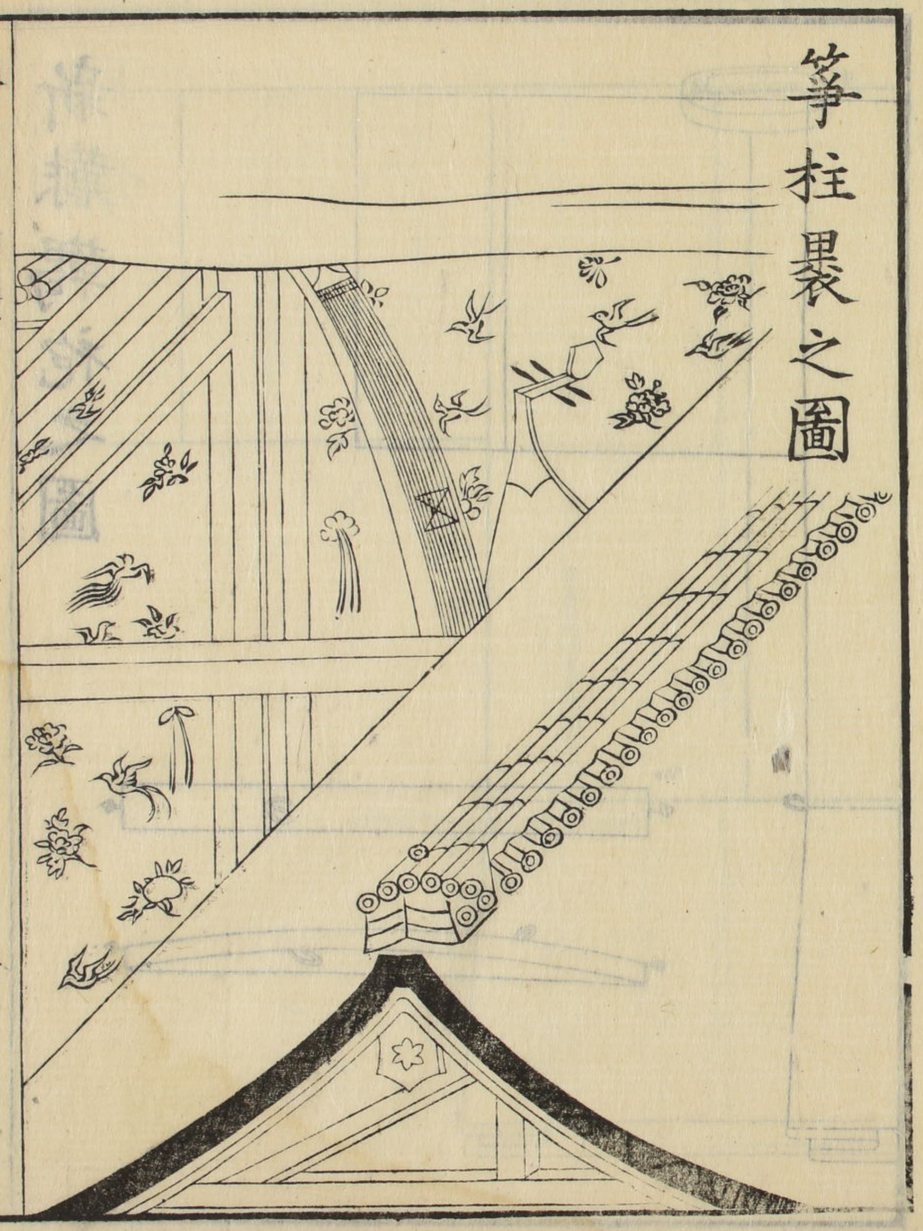
服中トイヘ氏神号ヲ書ㄱ宣亂卿記文亀二年二月十
一日甲寅天晴侍従三位兼俱卿所望之三社詫宣並天
神名号中略三社詫宣服中不可苦之由兼俱卿演説任
彼商量同月十七日三社詫宣一幅兼永朝臣所望書之
トアリ重遠甲乙録第八ニ垂加曰世所謂三社託宣非
託宣也賛也天照大神嵯峨天皇宸作八幡弘法大師春日ト
部兼延之作ト云リ是非ヲシラズ託宣ニハアルヽシケ
レ氏賛ナリト云モ甚シキㄱナリ予世尊寺家ノ三社
託宣ノ書法ヲミタリシカ天照大神宮八幡大菩薩春日
大明神トナラベテ横物ノ表粧ニスルヤウニカケリ神号ヲ

三神氏平頭ニシテ託宣ト云詞ヲ一字低書シテ二行ニ
カケリ當時ノ持明院家入木ノ託宣書法ノ傳ハコレニ
違ヘリ武家ノ具足櫃ニ入ルヽモノナリト云リ
色紙ニハ名ヲカヽヌモノトミユ小右記長徳五年十月廿
八日取要右大辨行成書屏風色紙形花山法皇主人
相府右大將右衛門督宰相中將源宰相和歌書色紙形皆
書名後代已失面目但法皇御製不知讀人左府歌
書左大臣件事奇怪事也トアリ
親長卿記文明十二年十月廿一日晴今日日本紀御談儀御
讀書也此度此間以民部卿被仰兼俱卿御侍讀可遣

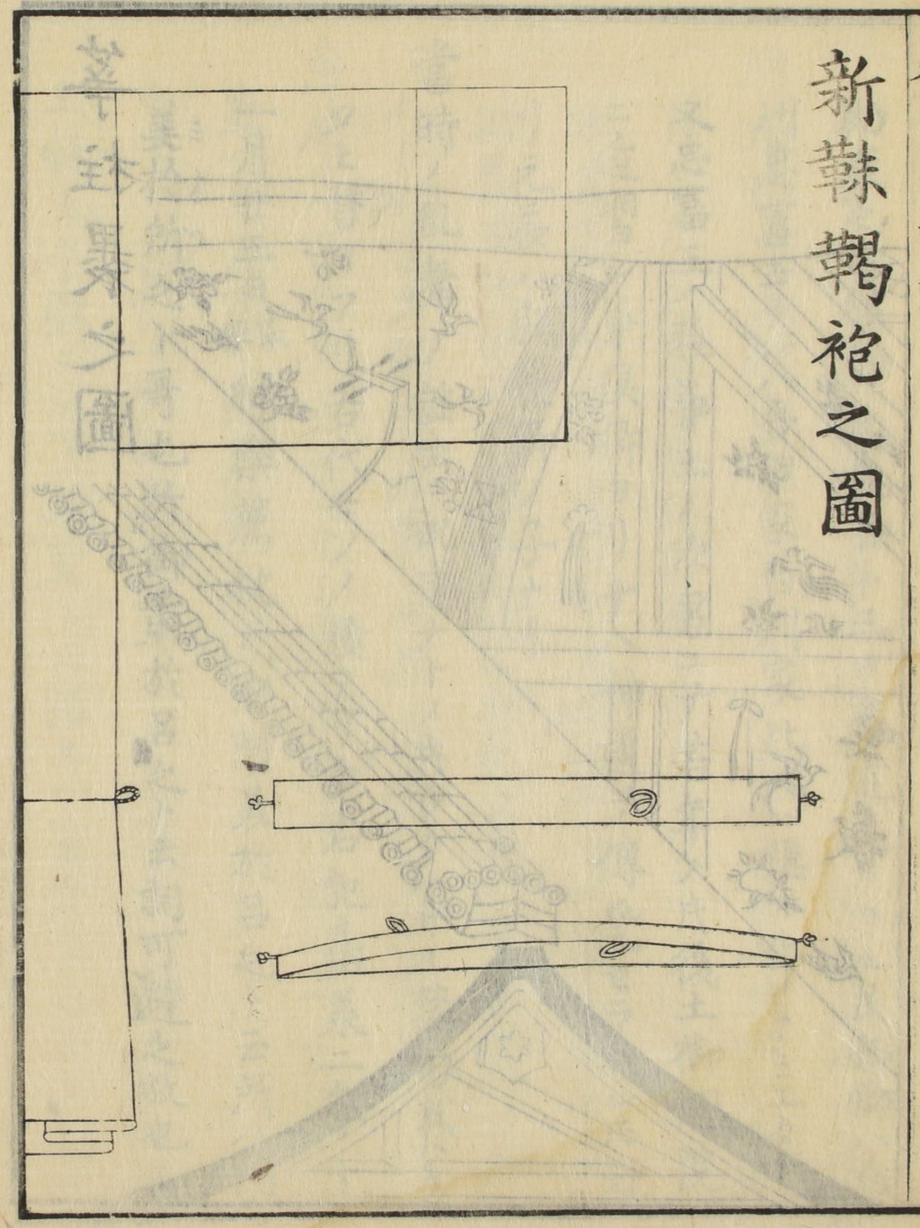
勅裁之由被仰元長去十三日書遣之トアル民部卿ハ白川忠富王ナレハ吉田家白川家此比ハ穏ナルコトニエタリ

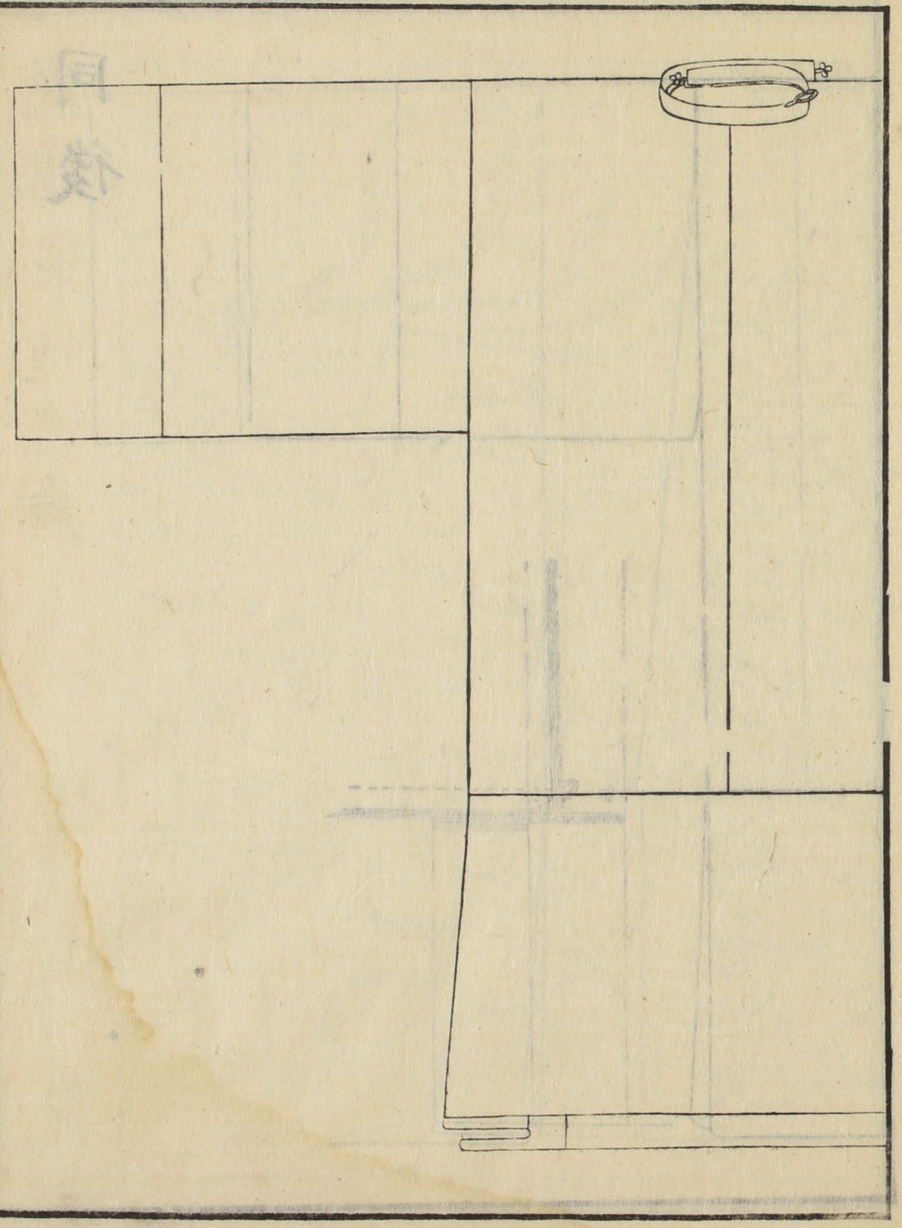
又忠富王ハ雅兼王ノ次男ニテ若年ノ比後土御門院ニ近習シ兼倶卿ヨリナハ神道ヲ傳受セラレ比云リ元長ハ親長卿ノ子ナリ

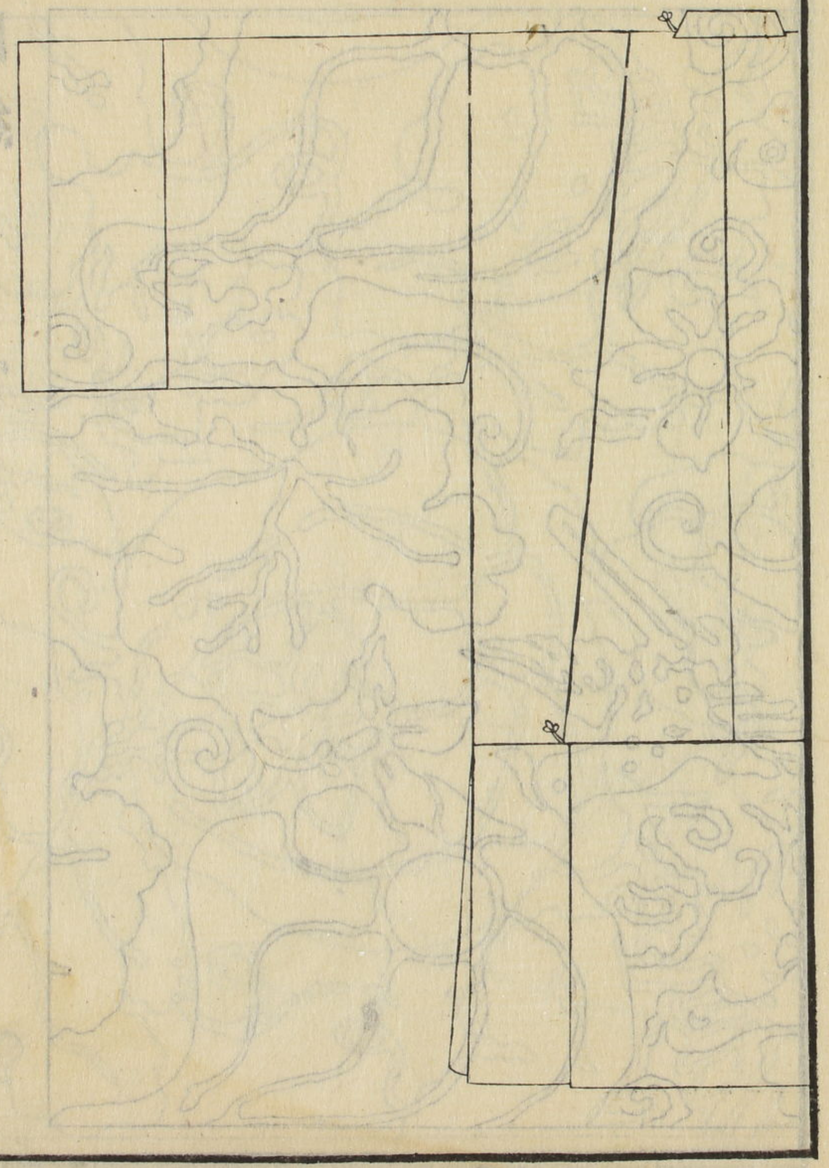
當時ノ乱舞ノ謡曲ニ祝言ナトノ比ウタハザル禁句或ハウタヒ替(カフ)コアリ古代モノノ類アリ中右記嘉祥二年十一月廿三日取要神樂薦枕之中阿羨於呂之ト云所ハ阿美於所(ミオリシ)之ト哥也於御前於呂之ト云詞可避之故也



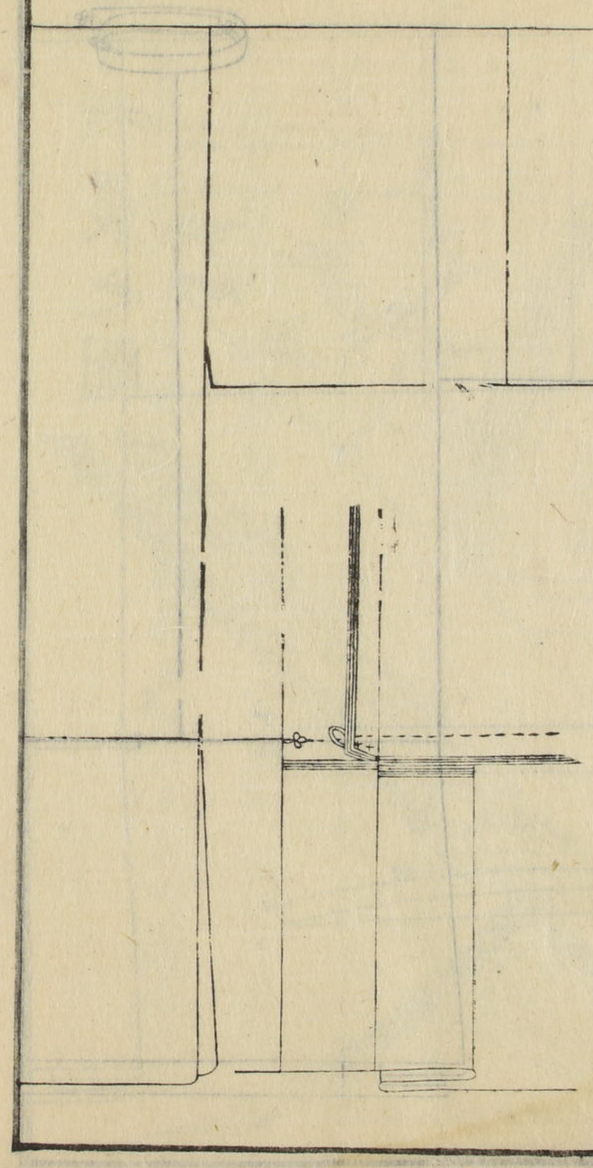
新韎鞨袍之圖

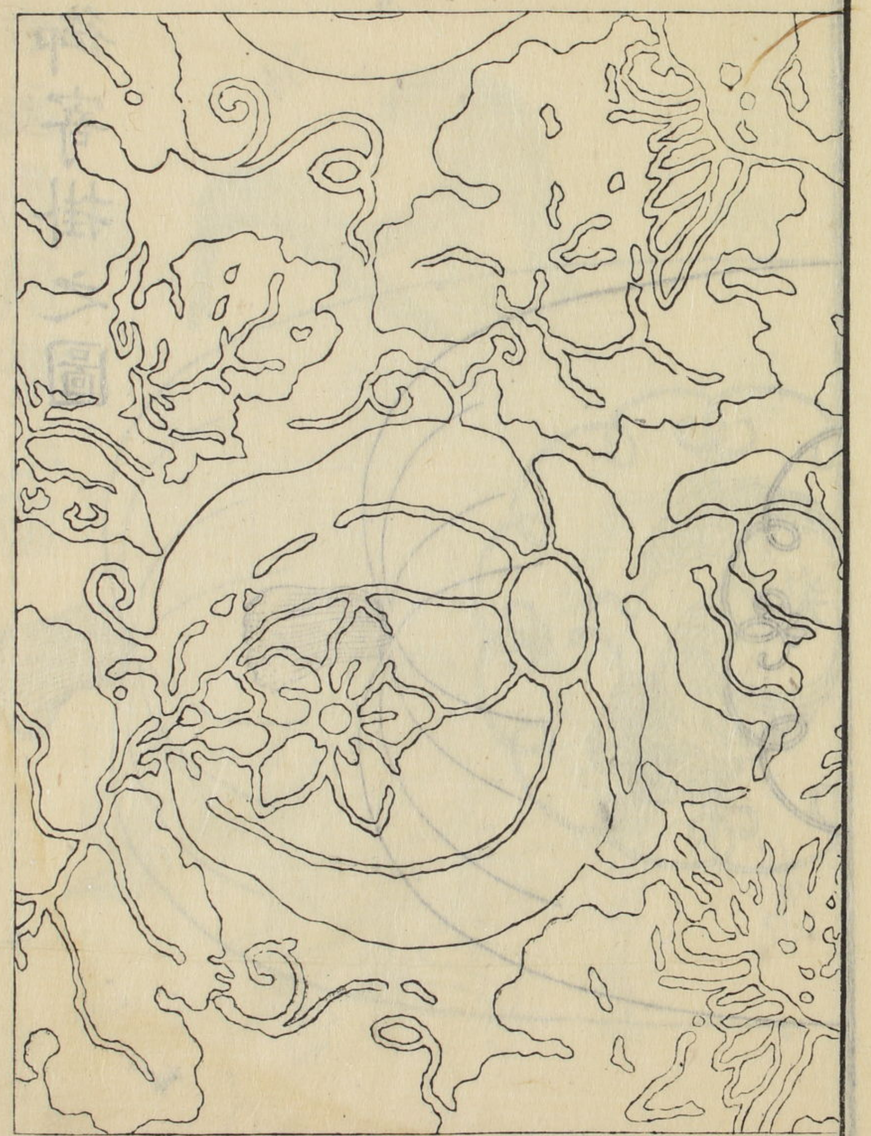




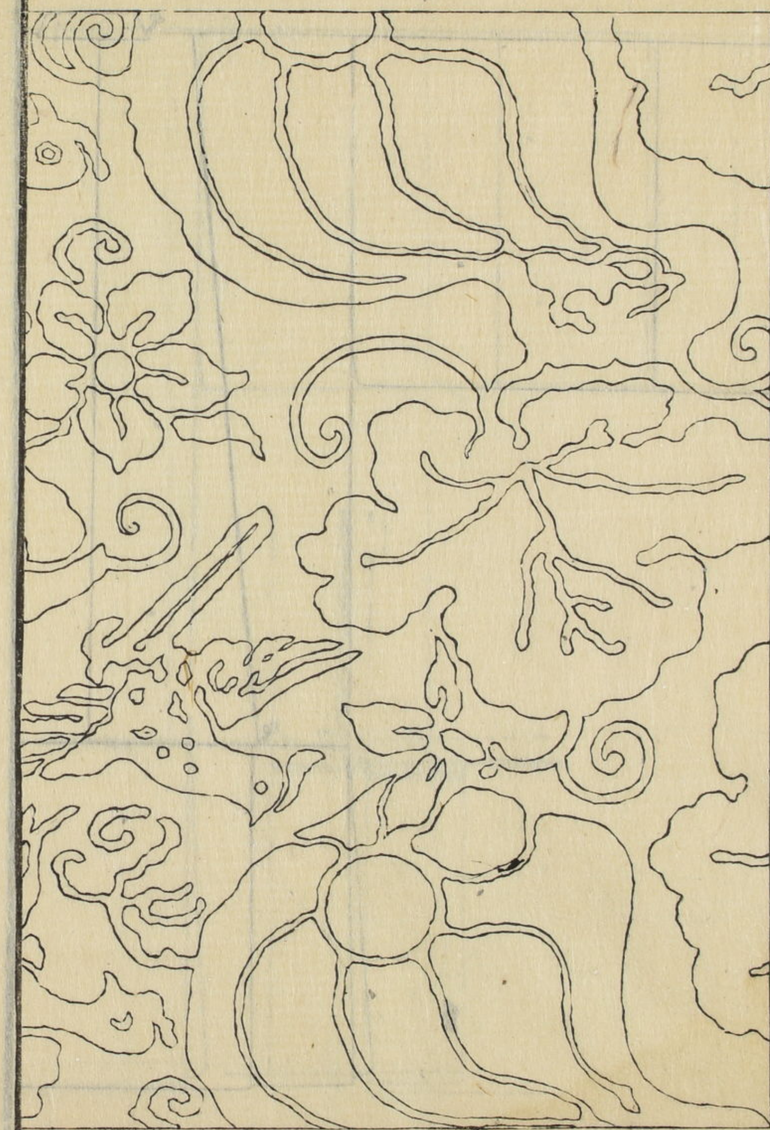


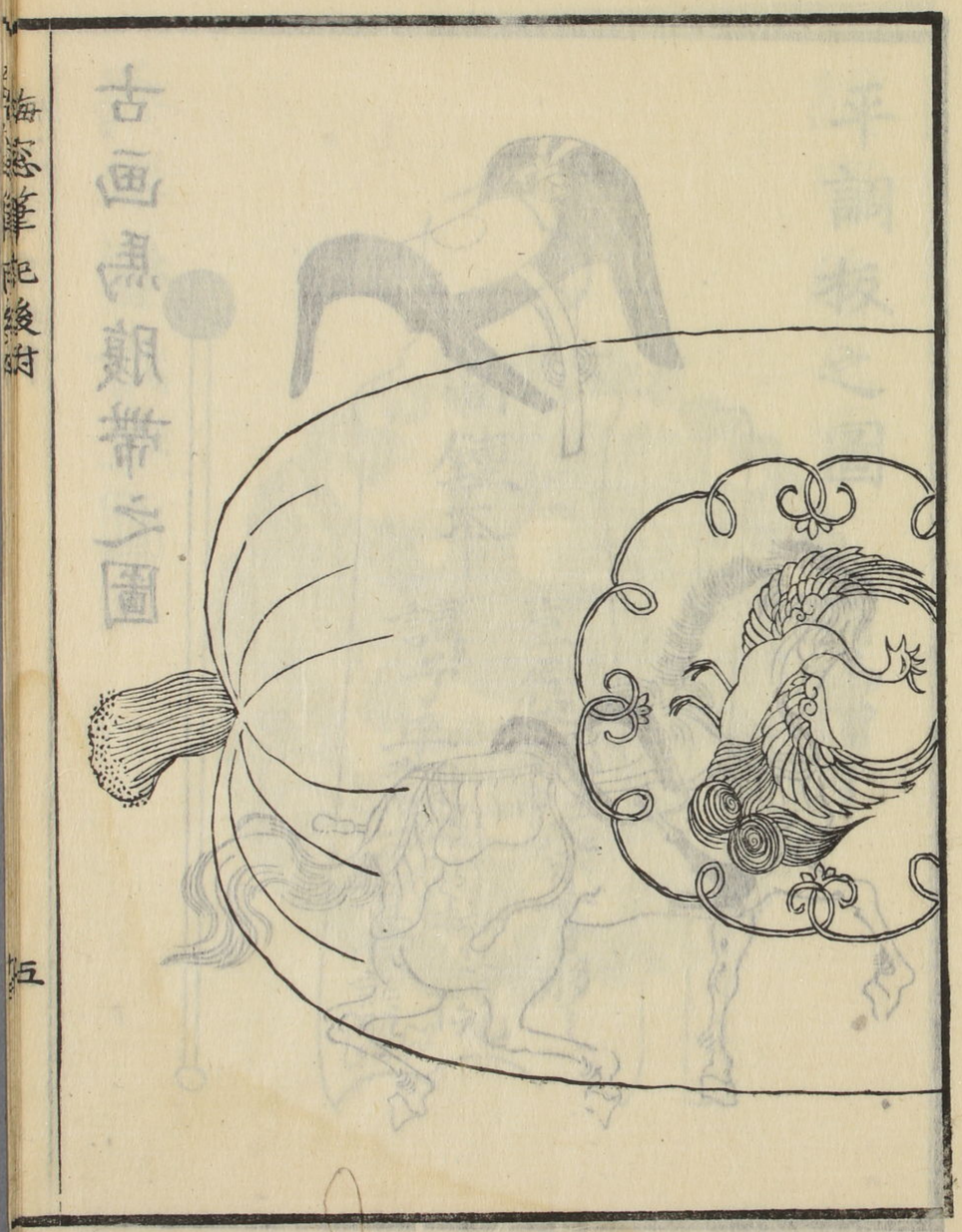
同後

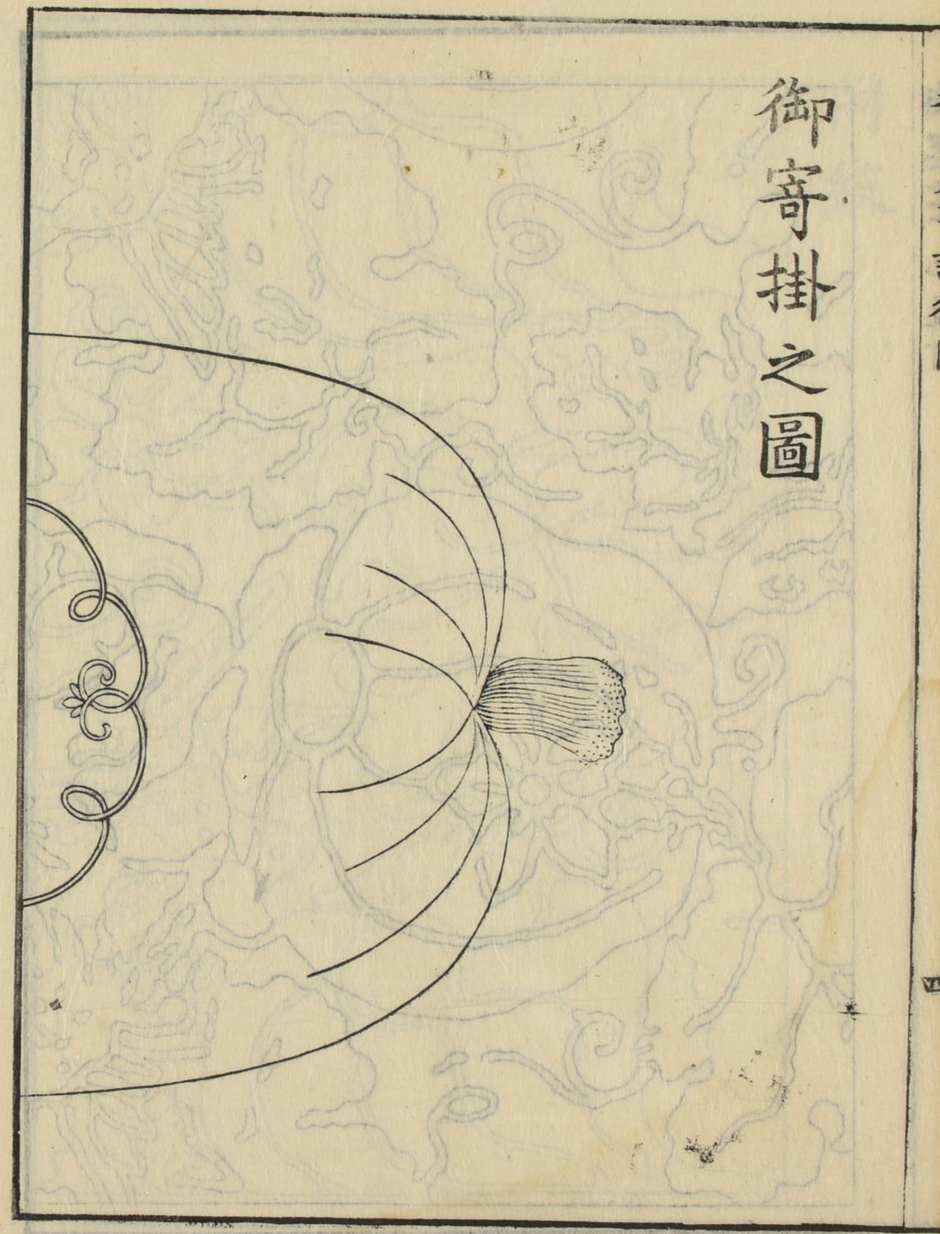




同紋

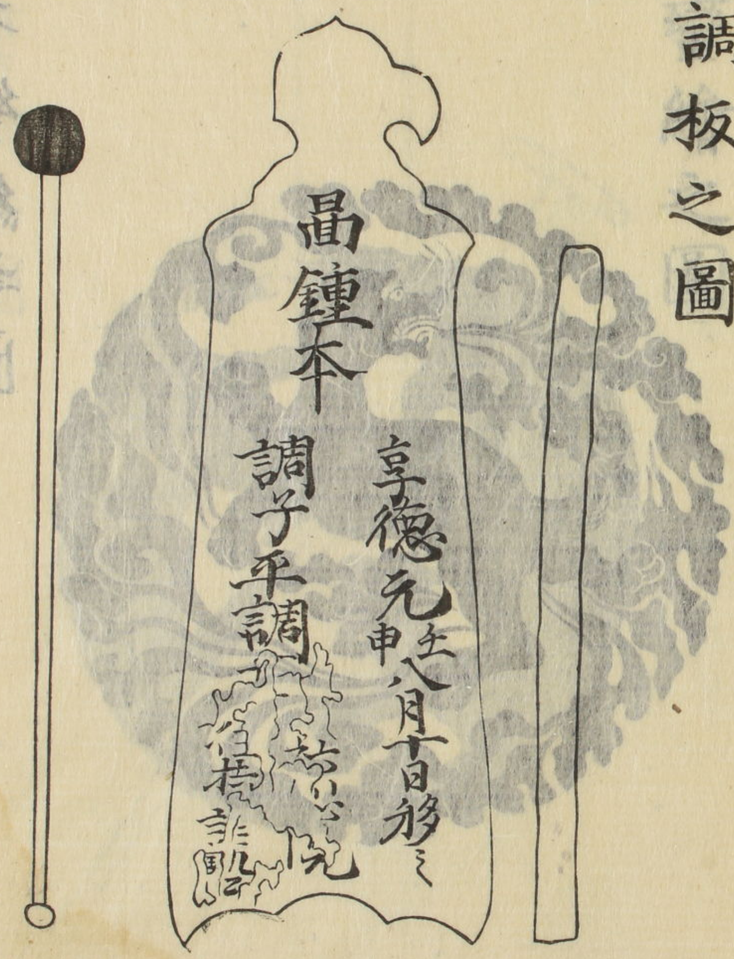



古画鳳凰帶之圖


御寄掛之圖

古画馬腹帯之圖

平調板之圖



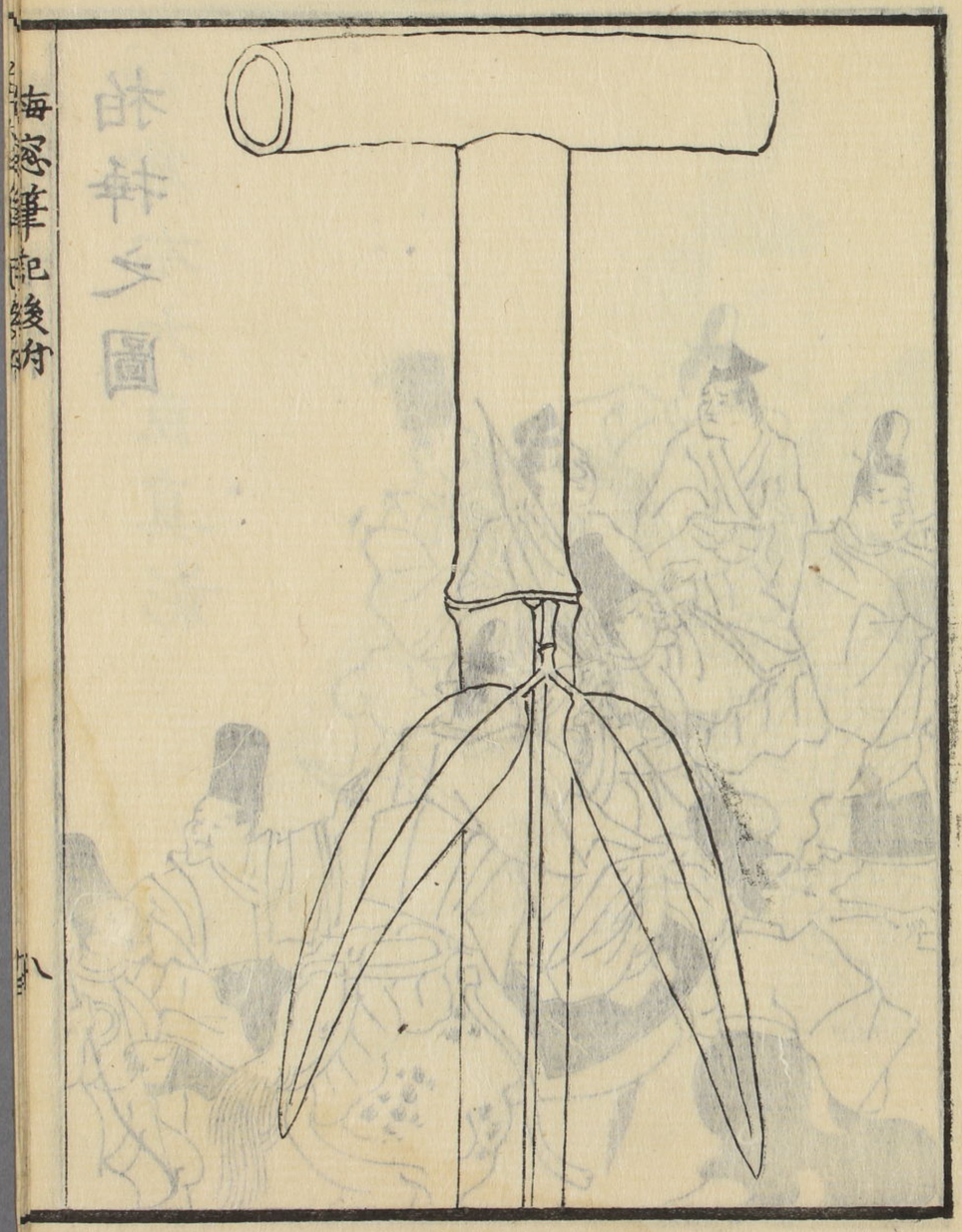
昭和文庫會員之圖

褐衣蠻繪之圖

平臨林之圖

繡蠻繪之圖

林實林之圖

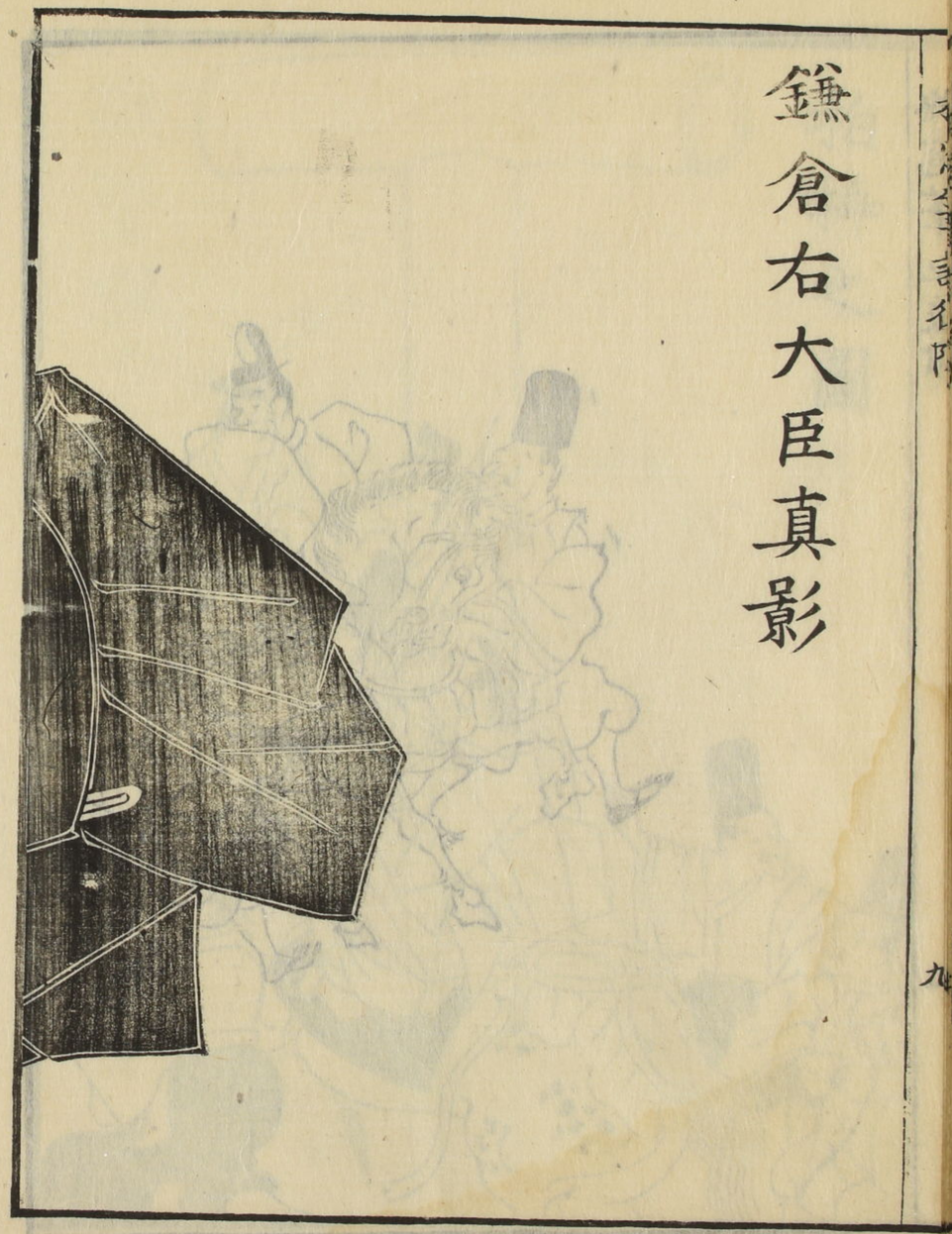

故軒之圖

御賀杖之圖
龍蟠餘之圖

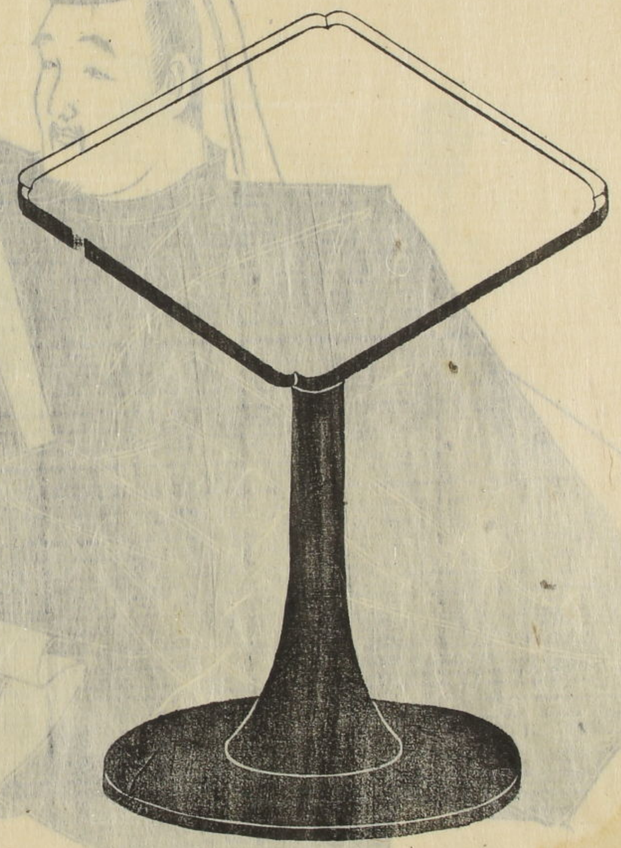
鈴會古大田真澄

柏挿之圖

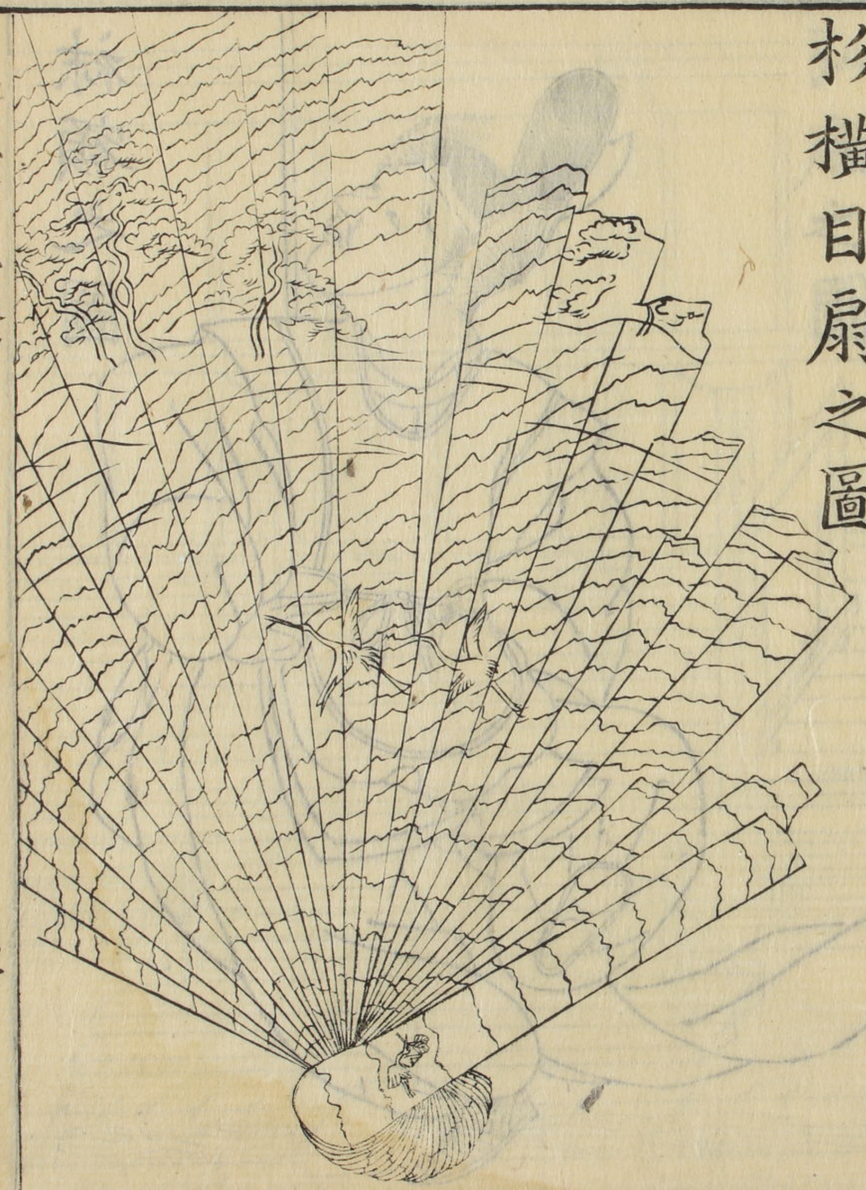
鎌倉右大臣真影



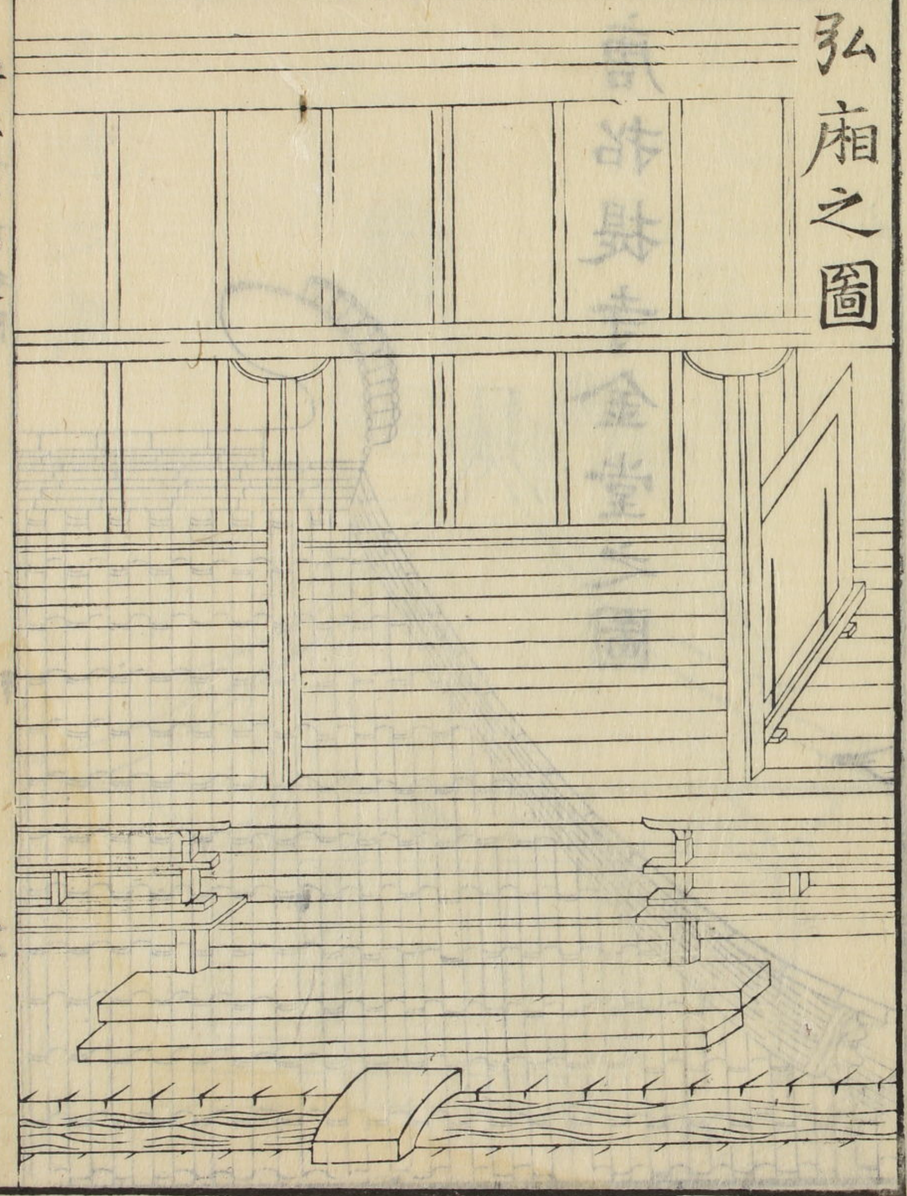
折敷作付高坏之圖



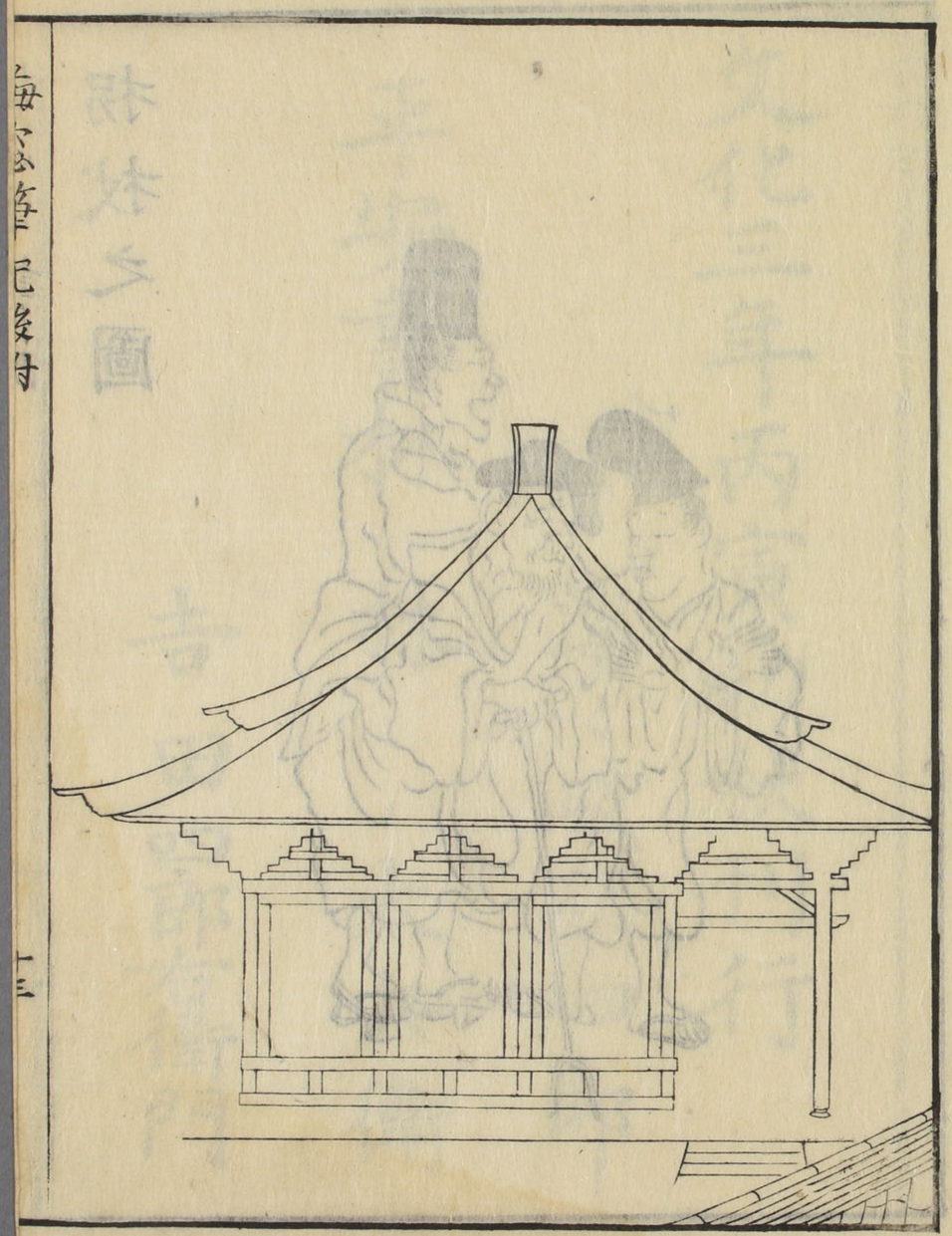
杉横目扇之圖



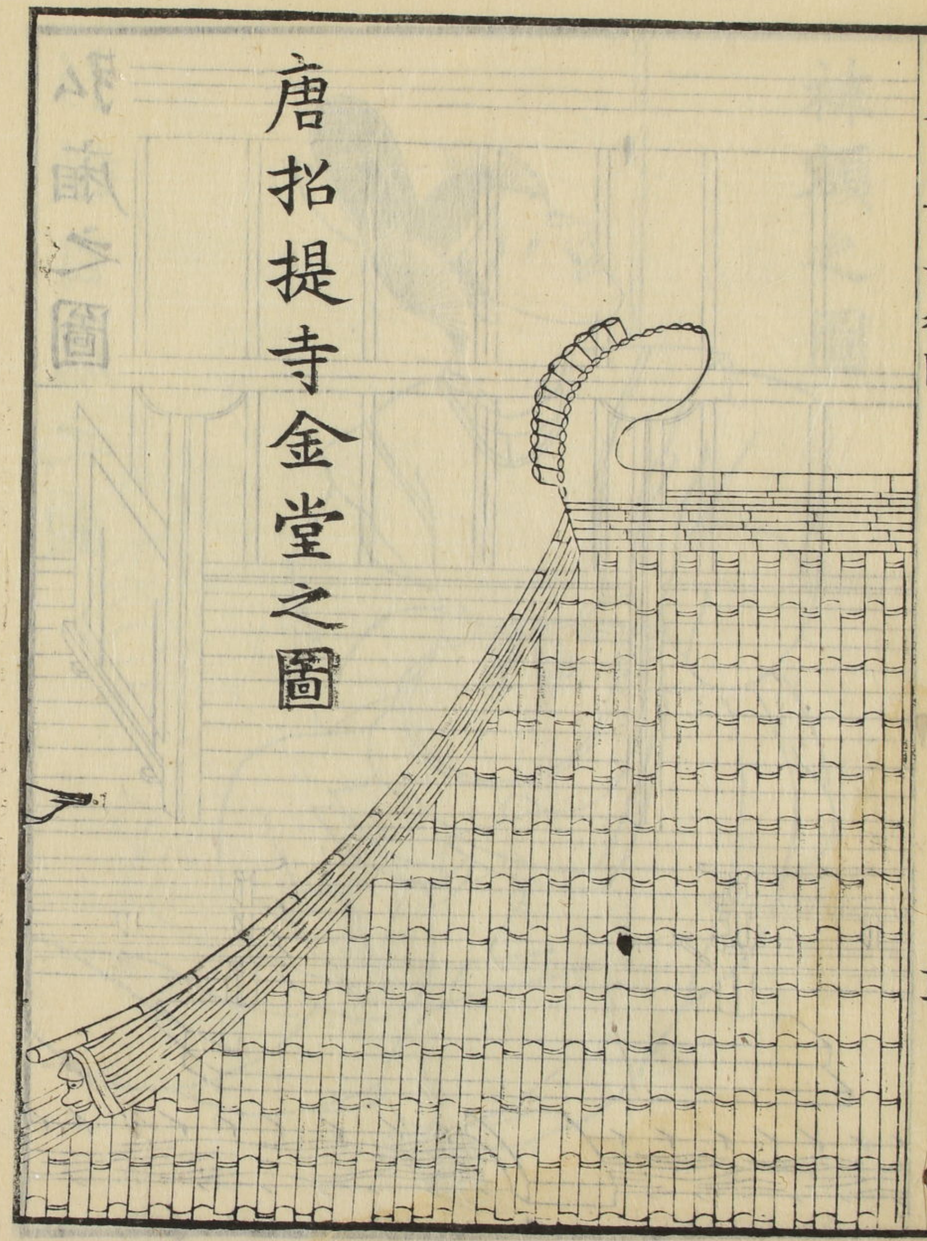
弘廂之圖



袜額之圖



唐招提寺金堂之圖



拐杖之圖

文化三年丙寅初秋刊行

平安書林　林　太兵衛

吉田四郎右衛門